



年頭のご挨拶



あけましておめでとうございます。

皆様にとって、新年が、穏やかで実り豊かな一年になりますよう、ご祈念申し上げます。

また一つ年を取りました。一年が着実に過ぎ、また1年、10年と、時が流れていきます。人口についても、将来の人口構成は、異変がない限り、未来はほぼ確定的に訪れると言われます。当面は、確実に人口が減少することです。病院は地域とともにあり、ニーズに応えることが求められます。ここで、改めて、地方の公的病院である町立病院の役割について考えてみたいと思います。

他県と比べて埼玉県には公的な病院が少なく、大学の附属病院や県立病院が高度先端医療を担っています。総合病院、日赤病院、国立病院などが、地域の基幹病院として、専門医療や二次救急などを担っています。

秩父医療圏に目を向けると、人口は約10万人で、県人口730万人の1.4%と少なく、面積が約25%であることと対照的です。専門病院も総合病院もなく、救急輪番制も脆弱で、域内での対応が困難な病状も少なくありません。人口比からして、医療スタッフの数も限られます。交通の便の悪い、辺境の地域で、出来るだけ高いパフォーマンスを引き出すためには、少ない医療資源を集約して効率的に運用することが求められます。

当院の診療圏を考えてみます。H27年、人口12117人。旧両神村との合計でみますと、30年前は16118人、50年前は17432人で、この50年間で、5315人減少しています。最近、減少のスピードが増し、年に200~250人減少しています。現在、高齢者人口が約4200人と、ピークに近づき、もう少しで減少に転じます。高齢化率は34%で、10年後には、40%に迫り、人口は10000人を割り込みます。



当院は、埼玉県内で唯一の町立の病院で、今年5月で65歳になります。開設当時は、保険あって医療なしという状況であったと思われます。病院は、生活していく上で必要な基盤（インフラ）です。交通の便の悪い当時としては、なおさら近くに医療施設、入院施設があることは悲願でした。人口構成も若く、対象疾患も、感染症や、外傷、急性疾患が多い時代でした。現在は、対象が高齢者、慢性・変性疾患、悪性腫瘍、生活習慣関連疾患などの持病が多く占めます。高齢者の問題は、医療より介護看護（ケア）の必要性がむしろ増します。急性期の治療期間は比較的短く、それが済むと、おおかた、回復期のリハビリや、退院転院の調整に時間を取られます。自宅に帰れず、受け入れ先がなかなか決まらない場合が多くなりました。医療が必要な状況というより、退院予備軍が多くなりました。社会的入院と呼ばれて、国では、病院以外の住まいへの移行を検討しています。患者さんや家族としては、入院していれば安心と、病院に対する期待があります。

アクセス（医療機関への受診しやすさ）、コスト（金銭的な負担）、クオリティー（サービスの質）の3つは、すべて希望通りにならないと言われます。いつでもどこでも保険証一つあれば診てもらえ（アクセス）、保険料や自己負担は安く（コスト）、設備が整い、専門医にも容易に診てもらえる（質）ことは理想的です。専門の医療スタッフと設備を整えた医療機関をいつでも受診でき、医療費は安く、医療機関の経営も安定するということが不可能です。社会資源が不足すると、「予約を取っておいでください。または、掛かりつけ医を受診して、必要があれば、紹介してもらえます。少しお待ちいただく場合があります。」という状況が想定されます。支え手が少なくなると、人に頼らないで済むように、健康寿命を延ばそうと努力します。ご近所で助け合い、最期が近づいてきたら、治療法やケアサービスを自分でよく考えて選択して、自分流に最後まで人生を楽しみ、あまり周囲に迷惑をかけない生き方を求めるのではないかと思います。町では、このような支援を行う地域包括ケアという仕組みに力を入れています。皆さんにもこのような考え方、仕組みをよく理解していただきたいと思います。病院は、地域における包括医療ケアの推進役として、医療は当然ですが、介護福祉（ケア）にも関心を寄せ、他職種と連携して、自宅や住まいで過ごすお手伝いを控えめに行い、入院は短く、なるべく自宅や介護施設、療養場所で過ごせるように、軸足を少し移していくのが良いと考えます。病院の役割は、立地条件や、外部要因等、時代とともに変わってきました。秩父地域に充実した総合病院があることが望まれます。ある程度マンパワーを集約させれば、地域で対応すべき急性期の診療の幅がかなり広がります。町立病院では、総合診療を中心に、プライマリケア（初期診療）をしっかり行い、高齢者の亜急性期の治療（持病の急性増悪への対応）、回復期のリハビリ、終末期の緩和、居宅での療養支援（訪問診療）を行い、包括的な医療ケアの実践を通して、この地域の基本的なニーズに対応することが、縮小しつつある地域における一つの処方箋になり得ると考えます。皆さんにも、持続可能な病院の理想的なかたちを考えていただきたいと思います。

《メロンにもしびさに優るキュウリかな》

院長 関口 哲夫

⑩ 《 目指せ！ 人生の3カン王 》

あけましておめでとうございます。皆様にとって
 去年はどんな年でしたか？

さて、平成29年4月から始まったこのシリーズ、
 おつきあいいただきありがとうございます。うれしい
 ことに「のぶえさんの話、いつも読んでますよ」「楽
 しみにしています」などと声をかけて下さる方もたく
 さんおられ、それを励みにがんばっています。

さて、今回はのぶえさんとあやこさんの話をお休
 みにして私の話をしたいと思います。

先日、ある町で認知症講演会の講師をつとめてき
 ました。その中で私は「認知症にならないように予
 防する方法なんかありません。ガンにならないよう
 に生活習慣に気をつけたとしても、ガンになる時は
 なるのと同じです。でも、認知症になっても困らな
 いように、今のうちから周囲に感謝しておきましょ
 う。そして自分もいつか天国に旅立つ（死ぬ）存在
 であることを時々思い出しましょう」という、なん
 だかちょっと無責任な話をしました。そのなかで『人
 生の3カン王』について少し触れました。若大将で
 知られる加山雄三さんの座右の銘が、この『人生の3
 カン王』、感（関）心・感動・感謝であるといひます。
 何かに関心を持ち、いつも感動し、常に感謝する。
 こんなふうに考えて過ごせたら認知症の予防になる
 かもしれないし（先ほど予防法なんか書いて書き
 ましたが・・・）、たとえ認知症になったとしても、
 いつも感動し感謝しているおじいさんおばあさんな
 らいいですね。

ドイツの哲学者、ニーチェはこう言っています。

『記憶力が悪いことの利点は、
 同じよいものを何度も初めてのものとして
 楽しむことができるということである。』

また、この感（関）心・感動・感謝は認知症の方
 を介護する際の一つの道しるべにもなるのではと思
 います。介護する立場から、相手に関心を持ち、時
 にその言動に感動し、最後はお世話することに感謝
 できればいいなって思うのです。自分もいつか介護
 される身として、今介護できることに感謝する。こ
 ういうふうに理想を語ることは簡単ですが、なか
 なか現実はそのないうまくいかないものですよ。

さて、去年の自分を振り返ってみるとどうでしょ
 う。毎日どんなことに関心を持って過ごした
 だろう。どれほど感動したことがあったら
 だろう。もし明日の朝目が覚めなければ、天国
 に行く途中で後悔するかも。ならば今年からは
 一日の終わりに感謝して寝ましょ
 うか。今日の一日がよかったと言えるように。

『今日という日は、残りの人生の最初の日である』
 （映画：アメリカン・ビューティーより）

今年1年が皆様にとっていい年でありますように。

総合診療科 医師 内田 望



外来からのお知らせ

変更

総合診療科：1月 6日（土）黒沢Dr.→山下Dr.
 眼 科：1月15日（月）当日受付時間11時まで
 総合診療科：1月20日（土）内田Dr.→黒沢Dr.
 心療内科：1月27日（土）→1月20日（土）に日程変更

年始の休診

1月1日（月）・2日（火）・3日（水）

一次救急当番日

1月2日（火）

☆年に一度は「人間ドック」を受けましょ
 う☆
 お問い合わせ：総合健診センター（病院内）

直通電話：72-7510



〈発行〉 国保町立小鹿野中央病院 〒368-0105 埼玉県秩父郡小鹿野町小鹿野300番地

電話（代表）0494-75-2332 FAX 0494-75-3313

〈ホームページ〉「国保町立小鹿野中央病院」で検索、または「小鹿野町」のホームページからどうぞ。